

會



報

昭和17年7,8月

118

日本山岳會

學徒と登山

四月二八日文部省は體育局體育運動課長の名を以て都下各學校山岳部の部長並に一名宛の學生幹事を文部省樓上に招致し、長時間に亘つて種々重大な打合せを爲したが、文部省自らが、る會合を催したのは實に本邦山岳界に於て全く初めてのことであり、席上各々隔意なき意見の交換を遂げ、就中同課長北澤清氏より大要次の如く當局の方針について委曲を盡した説明があり、且極めて熱誠溢れる言葉な以て學生山岳人の奮起を促すべく激勵せられる所があつた。我々は豫て期待してゐた所ではあつたが、果哉今茲に實に明快なる言葉に接して無上の感激を覺えると同時に、今後愈々渾身の力を振つて勇躍、學徒としての在るべき眞の山に生きたることを固く誓ひたい。茲に我々に示された當局の御理解ある方針に對して満腔の感謝を捧げるに俱に、今後更にそれを敷衍して永く我國山岳界に寄與せんことを衷心より期待して已まない次第である。 中村徳郎記

要旨

一、學徒と山
我々は何故山へ登るか。山が好きなるが故に山に登るのである。實際には山への行き方も各人各様に異なるであらう。斯くて身心の鍛錬といふ事もその目的・効果の一つたり得るであらうが、結局山に登ることそれ自體が純正な登山の目的である。國家目的に合致するといふのならば、愈々結構なことであり、文部省としても當然さうある事を希望し且その實現の爲の支援を惜むものではないのである。

る。しかるに曰く教養を高めよ、卒業を早くせよ、卒業したら直に軍教育を受けよ、それが爲には強健な身體を鍛へておけ云々と。一方學用品は不自由であり、運動するにも道具が無く、運動すれば飯が足らぬといふ障害が起り勝ちである。それ等の事の爲に畏縮するやうであつてはならぬ。單に登山の効果的方面にのみついて考へても、登山さか探検に對する理解や知識なくしては今後大東亞共榮圈の指導ならぬ絕對に出来ないことは明瞭である。

は全生活そのものである。實際に山に登る時だけではなく、平生に於ても精神的に肉體的に山に登る心構へを持ち、又實際山に登る爲のあらゆる準備を怠つてはならない。現在の日本は一人でも多くの教養ある人物を必要としてゐる際に、遭難者を出すことは絶対に防止したい。萬全を期して山へ行くべきである。然る上にも不可抗力の遭難があつたならば已むを得ない。其人は誠に氣の毒である。我々は更にそれを綿密に研究して後に資することを忘れてはならぬ。尻込みしたり懼れをなす如きだらしない事ではならぬ。勇敢に積極的に進んで貰ひたいと思ふ。

二、國外遠征のこと
時世の進展に伴ひ我國山岳界は俄然洋々たる前途を持つに至つた。即ち國外遠征の課題は今や現實の問題として我々の直面する所となつたのである。我々日本人の手によつて亞細亞の高山を究めたさいふ熱烈な希望が、その可能性と面も必要性とを伴つて實現に



目次

◆學徒と登山……………	中村徳郎…	1
◆山伏と勤皇……………	大伴茂…	3
◆アリユン・シャンと千島(下)……………	佐々保雄…	5
◆夏の八幡平と奥の富士……………	中村謙…	6
◆積雪期木曾駒の黒川本谷(下)……………	跡部昌三…	11
◆東印度諸島主要山岳高度表Ⅲ……………	吉阪隆正…	13
◆圖書紹介(未知のカラコラム、山と人)……………		7
◆山岳部欄(九州)……………		4
◆會員通信……………		8
◆會務報告、その他……………		14

迄至らんとしてゐる。而も之等の企てが副次的にせよ國防的使命と効果に多大の關聯を持つてゐる事を否定する者は無からう。然らばかゝる遠征行は一朝一夕に行ひ得るであらうか。否、それには先づその情熱と繼續的な不斷の山への訓練と研究と、年期さ、加ふるに出来るだけ早期より、即ち若き時代からのさう云つた準備が絶対に必要である。而も之を擔當すべき者は、全國民の中の選ばれたる人々、即ち限らない山への情熱を持ち的確に十分な準備と訓練とを経た諸君自身を措いて他に誰があらう。茲に於て各學校山岳部の使命たる極めて特殊であり、甚だ重大であること云はればならない。

右は國外遠征に關聯しての問題であるが、さりとて國內の山々が登り盡されたからと云つて之を疏んするが如き事は面白くない。先づ何と云つても國土の山を知り、味ひ、之を通して愈々祖國への愛と認識を深める事から出發すべき事を忘れてはならないと思ふ。

三、學校山岳部に關して

單なるハイキングとアルピニズムとは根本的に相異なるものと信ずる。そこでハイキング的な事は——それはそれで別な意味で又大いに發達普及せねばならない事だが——各校報國團の一般運動に委すべきであつて、山岳部は自ら其の第一とする目標を誤ることがあつてはならない。但し山岳部員たる者は必然的にハイキング的な事に關しても、其の技術や知識について他の者より經驗があるし先達でもある。従つてそれについて援助や指導を惜む事なく寧ろ進んで眞の山岳思想・登山精神の鼓吹に努力して貰ひたい。尙又從來日本山岳界が學生山岳層によつてその最高の水準を維持發展せしめられたといふ歴史的事實に鑑み、その榮譽ある歴史を忘れずに益々張切つて貰ひたい。と同時に社會人の行く山行形式に關しても是非理解ある同情を以て視られんことを望むものである。諸君自身も何れ學

窓を出た後はそれと同じ環境に在つて山に生きているのであるといふ事を考へるならば思ひ半に過ぐるものがある筈である。

次に各學校山岳部間の事であるが、從來各山岳部は夫々自主的に各々の道を歩んで來た。之は大いに結構なことである。山といふもの、特殊な性質から云つて正にさう在つて結構であつた。今後とも各々其傳統と個性を生かして一層綿密周列な計畫の下に其自主性を發揮して貰ひたい。唯考へねばならぬことはそれが爲に分立割據的に陥ること、之はいざといふ場合に學生山岳界そのものの爲に自ら不利を招く他の何ものでもない。お互に共通の問題——例へば食糧・資材の入手難についてなど——が多々ある筈であるから、かゝる事柄を縁として各々連絡をとるといふことは絶対必要なことである。一般に他の運動に於ては大概各校の各部を横に連絡する聯盟が組織されてあるが、残念な事現在山岳部關係には之が見られない。文部省としても近い中に之を設立すべく研究中である。勿論その中には學生諸君の委員が参加すべきである。

四、行政的な問題

斯くて學徒の體育の重大性に鑑み、體育行政の一元化を計る爲先

般學徒體育振興委員會が組織された。文部大臣を會長とし各専門家を網羅したもので、先づ文部省と一身同體と見て差支へない。出来ることなら山岳に關する専門の體育官を省内に置きたいが、官制上俄にさうも出来ぬので、此の體育振興會の内部に山岳委員會を設け、その中に有能なる山岳専門家を參畫して貰ふといふ風にしたいと思つてゐる。各學校長は現在既に體振の評議員であつて、各山岳部は部長、更に校長を通じて體振と極めて密接な連絡をとつて貰ひたい。同時に文部省體育局とも緊密な連絡を保つやうにすることは勿論である。

當局は陳情に來る回數の多寡によつてどうかうすると云ふ馬鹿なことは絶対にないが、或部門に關して責任以て他官廳に交渉する場合、その部門との折觸が密接であればある程より詳細な資料とより確實な基礎を有することが出来るのは當然であつて、結局その方が交渉が巧く行くといふ事にもなるのであるから、どうか諸君も遠慮せずに進んで積極的な連けを保ち、寧ろ當方の認識を深め啓蒙するといふ氣持で來て戴きたい。それには是非とも共通の課題を取上げて共同的な機關を通じて事を運ぶやうにした方がよいと信ずる。

單獨でしても勞多くして効妙いことは明かである。

五、學業と山

云ふまでもなく學徒は學業に勵むことこそ本分であり、従つて學校の學課を休まないといふ事が原則的な建前であることに毫も變りはない。一方大いに山へ行かればならぬといふ。然るに本當に山へ行くには休暇の日だけを利用してゐたのでは到底何も碌な事は出来ない。茲に一應矛盾が起る様に見えるのである。所で本當の山登りといふものは普通のスポーツと異つて、正に「文ヲ修メ武ヲ練ル」ことなのである。故にはつきり斷言するが眞の山登りは立派に學業に準ずべきものである。例へば眞に適切な企畫の下に穂高へ行くといふ一つの場合を考へて見るに、如何にしても土日曜だけでは済まされぬであらう。かゝる場合それが眞に適切な企てであつて、之が山岳部長、更に學校の認可を経て文部當局に許可申請があつた場合、更に檢討の上當局としては喜んで之を認可する方針である。それだけに諸君の山行は自ら省る所あつて常に立派なものであつて貰ひたい。

六、資材について

現下に於ける實際的な各種障害をどうしようとするのか。曰く靴

がない天幕がない、燃料裝備食糧が悉く無いといふ。而も諸君の志は枉げてはならないのである。殊にかゝる障害が若し諸君の山登りを畏縮せしめる様な結果に致すことありとせば、洵に憂慮に堪へない。

特に昨年の夏突如として諸君を脅した行事中止の指令は、諸君に對して重大な影響を及ぼしたものと如くである。その結果ともすれば文部當局は旅行・登山を閉塞させる方針であるかの如く早合點をしたり、又諸君自身も畏縮した様な氣配が見えるのは、全く文部當局の本意とする所に反するものであつて、遺憾千萬である。當時の事情は止むを得ずかの處置をせしめたが今年度以後は希望を持つて大いに積極化して戴きたい。文部省は心から之を待望してゐる次第である。

而るに山の資材は全部が之軍需資材であつて、總て物資動員計畫によつて動かす以外どうにもならぬものばかりである。従つて之が最低限度の圓滑な入手を期すにはどうしても各官廳業者の理解ある協力に俟つ他はない。我々が觀するに眞の登山に用ひる登山用具は立派な學用品であると信ずる。しかしながら實情を明にし、更に之が正確な計畫性を持つた數字を出

きないことにはどうにもならない。そこで近いうちにその精確な大々の調査を行ふ心算であるから、是非とも諸君の善意ある協力を希望する。之は今年度中に完了して來年度の物動計畫には之を繰入れる事が出来るであらう。現在の所暫く今までの如くに、手持のものを愛護して我慢をして貰ひたい。但しザイルだけは最も喫緊の事と思ふ故、殊に麻が有望となつた今日は是非何とか早速入手出来る様に取計ひたい。又器具に關聯してであるが、山岳部員の經濟的自己負擔が他の部員に比して甚大であらうと思ふ。従つて出来るだけ公共品の如きは學校の手で揃へるべく學校當局に督促するつもりである。此の旨承知ありたい。

序であるが、各校が有してある山小屋の問題であるが、之も總ての學校について施設の問題として當局に於て十分考慮して見たい七、關東高校山岳聯盟について

右については、事柄自體は悪くはない。類縁の者相寄つて團體を組むことは結構な事である。併し仰々しく聯盟と云ひ物々しい規則を定める如き形式ばらずに、隨時集つてコンパを催し、山話に一夕を過すといふ所に却て意味がありはしまいか。殊に高等學校の山岳聯盟の中心を何の理由か東大内に

置くことは不可である。文部省としては賛成し難い。高校の事は高校自身に任すべきで、その本部も寧ろ例へば一高内に置いた方が適切である。但し各先輩が夫々後輩の指導に當ることは、必要な事であり今後益々獎勵されねばなるまい。

八、日本山岳聯盟について

所謂岳聯は一般社會人を對象としてあるものである。その中に諸君の先輩である著名な山岳人も居るが、岳聯そのものは無組織な一般の登山者を目標とするものである。岳聯が學生山岳人に對しては何の拘束力も指導力も有するものではなく、又有すべきものでもないといふ事を明確に認識しなければならぬ。學徒の山は他く迄も學校當局と文部省及その外廓團體とが緊密有効な連絡を保つて、どこまでも學徒らしい山の生き方に終始しなければならぬといふ事を強調する次第である。

圖書室開室時間

毎	日	正午開室
月	水金	八時迄
火	木土	五時迄
日	曜祭日	閉室

皇 勤 と 山 伏

茂 大 伴

山伏とは山で修行する佛者の事をいひ、廣義では釋迦、弘法もさうである。ところが今では山伏と修行者を一つにしてゐるが、實は内容に於て廣狭の差あり修行道な

奉じて山で修行し験を得る者を修行者といつたが、平安朝初期頃から之等が多くなつたので、修行者を山伏と混稱されるやうになつた。

徳川時代の山伏研究は本筋より大分離れたものになつたやうに思ふ。又山と山伏の關係は役ノ行者を調べない事には山との關聯性及山伏の根本精神といふものは判らないと思ふ。修驗道は明治初年廢止となつたが修驗道發展の爲めには大いに結構な事であつて、總てそれが役ノ行者の本來の精神に立還つての修驗道再建の機會でなければならぬと思ふ。

山伏の精神、それは役ノ行者の

精神である。行者の一生を眺める時二つの大きなものに考へつく。即ち 山で鍊行をした事

山で祈誓を持つた事

である。十七の年から五十年間、山で鍊行し、祈誓を持ち、そして山から山へと入つてゐる。行者は山の高さに崇高を見出し、山の深さに深刻を味ひ、山の重さに神秘を得、山の靈に靈動を知つたであらうと思はれるのである。釋迦ソロモン、ゾロアスターにしても五十年も山にはゐなかつた。では行者が何故山に入り山で修行をしたか。又山で何を祈つたかを考へてみたい。

行者は大和國御所の東、茅原で生誕したといふ。舒明天皇六年正月といはれてゐる。その邊は加茂氏の本據であり、行者は實にその子孫であつた。父なる人は出雲から養子に來たといはれるが、又帝の落胤説もある。茅原は飛鳥に近く當時の都に近い別荘地帯とでもいへるところで、母がそこに住居してゐた事から考へても、大宮人との關聯は深いやうに思はれる。行者が十二才の時に大化改新が行はれてゐる。豪族であつた行者は佛道から入つて學問を勵んだが、當時は歸化韓僧が巾を利かした頃であつたので、行者はその外來思潮に激しい反感を抱いた末十七の

年遂に學問を棄てて雪峰葛城山（古代文化はこの山脈に植ゑつけられてゐた）に入り、日本生粹の心を擱まうとし、日本國民としての熱血をたぎらせたのであつた。行者は神に近づかんが爲に山に入つたと思はれる。彼は何れの教祖もが爲した如く實に山で鍊行をするばかりでなく尊皇護國の大いなる祈誓を有つてゐた。人を救ひ世を救ひ國を救はんとした。

さて山伏の行に三つの特徴を見出す。第一に天孫降臨以來日本は山に初つてゐる。山伏の行の第一の特徴は、神の心を知り神の力を得んとする處にある。第二の特徴は凡ゆる困苦缺乏に耐へ山頂まで登つて行つたといふ點にある。之を山伏では抖擻といふのである。凡ての腦みを打拂つて行く、言葉をかへていへば開拓をしたといふ點である。第三の特徴は命を互に托し合つてゐたといふ點である。そこに共同一致が出来、ある大きなものが自然と生れて來てゐたのである。昨今の登山人も開拓の行としての登山を考へて頂きたい。

山で薪をたく。あの火、その煙の中にも神の姿が現れてゐないだらうか。山の木は神の木である。然し行者はたゞ外來文化への反動で山に入つたのではなく、祈誓を得んが爲めであつた。入峯の前には

必らず神を拜してゐる。熊野から大峰に入る時は熊野三山に祈り、吉野から大峰に入る時は吉野三社に祈つてゐる。かくて三十四才の時頂上で藏王權現を感得し旺んに寶祥修久・敵國降伏を祈誓した。この時の權現は地から湧いて出た真に動的なものであつた。

所が徳川時代になつてこの山伏の鍊行祈誓を修驗學者達は十界の行にわけて説いたのである。即ち山を金胎兩部の曼陀羅と見て

- 1 地獄行（業をはかられる行）
- 2 饑鬼行（穀絶ちの行である）
- 3 畜生行（水絶ちの行である）
- 4 修羅行（打ちこみ鍊へる行）
- 5 人間行（六根清淨と稱へつ、懺悔する行）
- 6 天道行（延年の舞をやる）

以上六行を以て六凡修行といひ、あとの四行を四聖の修行といふ。

- 7 聲聞行（四つの悟りの行）
- 8 緣覺行（生死を悟るの行）
- 9 菩薩行（大悲代受苦の行）
- 10 佛界行（愈最後の行で父母所生のこの體の儘で

大日如来になるの行）

之等の組織立つた説法に依り修驗道が擴大されたが、明治になつて一旦消滅されたのだが、今こそ役ノ行者の初めの精神に戻つてほしいもので、十界を知るだけが山伏の本當の姿ではない。之に祈誓

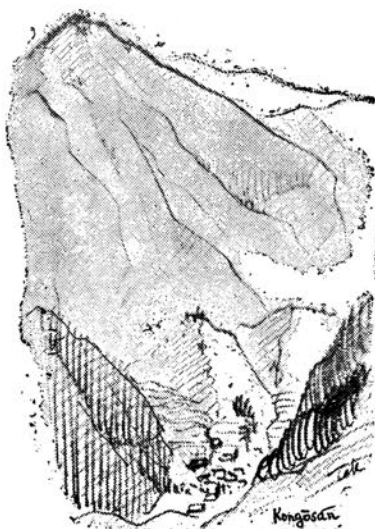
がなければならぬ。又生活に誓旨を與へねばならない。佛界ではイ 床整の修法（即身成佛の形儀であり十界一如の至極である）

ロ 柴燈の修法（護摩である。即ち火を以て罪を滅するの修法）

ハ 關伽水の修法（水を以てする善を生む修法）

といふ。然し乍ら山伏の本領はこれ等の鍊行だけに止まらない。旺ん

なる祈誓に生きる。祈誓も實に尊皇護國の大運動に渾發したことを注意した。



山伏の勤皇といふ事については次の三例を以て充分説明出来る。我が國に於て國體明徴を必要とする時には必ず山伏が大きく浮かび上つてゐるのである。即ち

1 大化改新の時、2 建武中興の時、3 明治維新の時がそれである。之は私の獨斷であるかも知れないが、大化改新當時、彼等が皇居を護らんとした形跡が偲ばれるのである。それは葛城山脈廿八ヶ所の行場を實は大唐帝國の侵略

に備へた砦と見る時、また大峰連山の一大道場を熊野よりの一大聖壘と見る時實に興味多く想到されるのである。役ノ行者は實に大宗教家、政治家そして軍略家といふべきではなからうか。

次の建武中興の時には、醍醐の山伏文親、吉野の山伏宗信、備前の兒島高德が聯想される。内山永久寺、吉祥草寺、轉法輪寺等に於ける數千の山伏の活動振りは目撃しい。殊に大和内山永久寺には千餘名の山伏がゐて、大塔宮もここに遷幸遊ばされた。此處の山伏は天皇を守護し奉つた。それから大和の吉祥草寺に立寄らせ給ひ、水越峠を越へ楠、和田一族を召されついで金剛山頂轉法輪寺へ着御された。之より吉野に向はせられたが吉野の山伏宗信は恐懼し

てお迎へ申上げた。此處に南朝の基礎が建てられたのであつた。兒島高德が山伏であり（富岡鐵齋も認めてゐる）楠正成も武將ではあるが家柄は山伏であつたやうに思はれる。大江時親も然り、正成が金剛に城を造つたのも後に金剛山伏が控へて居ればこそ少數の兵を以てあれだけの大量と對峙出来たのである。當時の山伏は

1 大義名分を知り大集團を到處に持つてゐた

2 經濟的基礎が堅く地理に詳しく聯絡がつき易かつた

等により國家有事の際、大いに武將の利用する處となつたが私は寧ろ山伏が武士を第一線に出して畫策したことも考へてゐる。

第三は明治維新であり本山派山伏が盛んに動いたし、甲賀山伏が勤皇運動をやり、彦山山伏は山を擧げて尊皇攘夷の運動に突入して居り何れもが敵國降伏運動を實踐してゐた。

世界維新の今こそ日本の本當の山伏の出るべき時、出さればならぬ時であり、尊皇護國の精神を持つた若き日本人が輩出し、この日本を護り東亞を指導して行かねばならぬ事を切實に感ずるのである。（關西支部研究會報告富田記）

山岳部欄

北九州學生山岳懇談會（假稱）
北九州大學高専山岳部の連絡懇親の意味で六月十四日第一回北九州學生山岳懇談會を福岡市水茶屋奉公館にて開催。

國民儀禮開會の辭に引續き九大小島君の懇談會についての説明。
次で各山岳部委員の山岳部現況夏山プラン、希望等の發表。

研究發表として九州醫專小野君の「積雪期幕營食糧私見」談話として九大山岳部長江崎悌三博士の南方探検に關するお話を承つた。
次で座談會に入り、部のこと、修練、道具食糧について意見を交換、懇談會の方針、仕事に關する希望が述べられた。

九時半散會。参加校、九州帝大福岡高専、福岡高校、久留米高工佐賀高校、九州齒科、西南高等部九州醫專（約三十名）
當番校、九州醫專（九醫小野庸記）

本年度會費納入未済の方は至急御送金の程お願い致します
（會計）

アリューシャンと千島(下)

佐々保雄

之を要するに、高い海崖を廻らした島々、白い波を噛んである暗礁、ゆるいおほらかな山背、その上に、雪をつけてスツクと聳え立つた美しい火山、その丘の一端に立つと、見はるかす收場のやうな草原には色とりどりの花々の咲き亂れて、低い北の空を明るくしてゐる！と言つた景觀が、サツと風にはらはれた霧の間から眺められると想像すれば、彼の地の感じが稍々出るのであるまいか。

○ 扱、この列島の主な山は皆火山であると言つたが、それではどの様な高さのどんな山があるのか。残念乍ら列島の正確な地形圖とて手許にないので、僅かに米國地質調査處の諸調査報告や水路部の海圖、水路誌等を便りに尋ねて見る事とする。

之によると列島には一〇〇〇米以上一五〇〇米迄の山が一〇、一五〇〇米以上二〇〇〇米迄が九、二〇〇〇米以上二五〇〇米迄のものが五、二五〇〇米以上が一であ

る。則ち最高が二八六九米のシシャルデイン(ウニマク島)で、富士山よりも山頂の細い圓錐狀の山の姿は寫真で屢々我々の目にも觸れてゐる。次の二千米臺の山は四山列島の一、チュギナダ島に聳えるクリーヴランド(二四八六米)、同じく四山列島のカーリ

界に現れてくる様は、寒い北の航海者の眼をどのやうに魅める事であらうかと思はれる。

地質調査の傍、各所を歩いて居られる。(北洋アリューシヤンの旅行、地學雜誌第四三—四四年、五一四—五一六號、昭和十六—十七年)。又、氏と同行された小林義雄學士(アリューシヤン列島の生物、地理教育、第二五卷、第五號昭和十五年)や、又上記高橋氏と同行された館脇博士(アリューシヤン列島の初夏、科學畫報、第一六卷昭和六年)等も、列島の風物を巧みに描き出されてゐて、遊意をそゝるしきりなるものがある。

人アリウトとて、狐狩り以外遠出をしない事でもあるから或はその頂のあるものは未だ人の足の感觸を知らないものがあるかも知れない。そうとなるとき、又、我々の望みも一きは高まると言はねばなるまい。

スル(二二八六米)、ウニマク島のイソノツキイ(二四六五米)、ウムナク島のヴセグイドフ(二二〇六米)、タナカ島(二二二六米)等、我が千島での、否東北以北の最高峰アライトも(二三三九米)高さから言へば漸くイソノツキイの次に位するに過ぎず、千島で次位の國後島チャノメブリ(一八七二米)は位ざりから言へばアリウシヤンの山々の前頭に入るか入らぬかと言ふ處である。何も山の高さが、そのものが、物を言ふ譯ではないが、どの山も島と言ふ特異の環境にあつて、海際からその高さ正味霧の世界を貫いてスツクと北の空に聳えてある山容は、確かに美事なものに相違ないと思はれる中でも四山列島は相接近した島々に、右の二千米級の二島を始めヘルバート(一六一三米)ウリアガ、カガミル等千米を抜く山々が相競つて天を衝いてゐる様は正に壯觀に違ひなく、それが特に初夏の豊かな残雪をまといつて、次々と視

なほ以上の山は高くないがなほ見るべき山々を擧げて見るとアンドレアノク群島ではケレロイ島(一六二四米)、クレイトシトキン島(一七五〇米)、サリチエフ(一五七七米)、コロウイン(一四七九米、共にアトカ島)、フオツクス群島ではマクローシン(一七六四米、ウナラスカ島)、ボグロムノイ(一九八一米)、ラウンドトップ(一八七六米、共にウニマク島)等があり、何れも海際からスツクと聳えて航海者のよい目標になつてゐる。

之等の讀物を通して見ても、又寫真や地圖等を見ても、この列島の山々の登山は決して困難でなく、寧ろ極めて容易であらうと推定される。山容は既に述べたやうに、多く富士形のなだらかな山腹であるし、山麓一帯も千島の山のやうに、偃松やはんのきの歩みを妨げるものさでなく、一面の草原であつて見れば、あとは天候を見圖らつて、足を上に向けるだけの事にすら思はれる。米國のコーストカードでは近年精密な兩測量をしたとの話もあるしするから、その頂きの多くは或は既に先人によつて踏まれてあるかも知れない。

まして、特に注目すべきことにその山には、千島の山々を違ひ、嘗ての水河の跡が歴然としてゐる。現存の水河は僅かにウナラスカにありとも言ひ、全く無しとも言はれるが、少くとも嘗て水河時代にその谷間を埋めたであらう水河の痕跡に至る處に認められてゐる。廣いU字谷、谷壁を削り去つた擦痕、なだらかなモレーンの丘、その間に山の姿を寫す水河湖等そこには確かにたゞの景色でない、田中薫教授の言はれる「水河の香り」が漂つてゐるに違ひない。高ささて、三千に達せず、單なる、圓錐火山に過ぎないこの列島の山々も、それが、北の霧の世界に聳え、異境の風物を藏してゐるだけで、確かに我々の注目を惹くに値する。ましてそが、或は未踏の頂きであつたり、水河の香り漂ふ谷間であつては、カムチャツカやその背後のアラスカの山々と共に、このアリウシヤンの山々も更めて見直されても、と信ずる。單に山登りの見地からでも、

此等の山々の山登りは一體、どうか、不幸にして、寡聞な筆者には所謂登山記事には未だ接しないが、日本人では昔時折寄港した船員等の、ピクニック程度であらうが、澤口近くの山登りの楽しさも開いてゐるし、又昭和四年館脇博士と同行した北大山岳部の高橋喜久司學士はアツツ島の山に登られ、その旅行紀は同部々報第二號(昭和四年)に載つてゐる。又現商工省地質調査所技師近藤信興學士も、昭和六年、報知新聞社吉原飛行士の太平洋横斷飛行監視船に便乗され、列島の島々を訪れられ、

漁業監理者又は軍務關係者が生物考古、地質等の學者等しか出入りの無いこの列島であるし、島の土

南の五千メートルの山々と共に、この北の二千米への準備を我々はして置いて、時機に思はれる。特に生物や、地質、考古、人類等の科学上の諸問題は、この列島に於いては我が千島列島よりも未解決の點が多いまゝに残されてあるし、又産業上特に漁業上からは將來の根據地として極めて大きな位置を示してゐる。之等の諸問題を我が千島との對比に於いて解決することは太平洋に於ける日本の位置を考へる時甚だ意義ある事と信ぜられる。

「アジアへの飛石」と言はれるこの島々が「アラスカへの飛石」として我々の足場となりその多くの火山からの噴煙は我々を導く道しるべとしてなびく感じのする日ばかりの事であらうか。嘗て、北千島からカムチャツカの白い頂きを望んで抱いた希望は、年々共に更にこのやうに大きくなつて來た。

近頃では一きは南の山への志と共に北の頂きへの憧れが、彌ますのを覺へる。その願ひの果される日の近からん事を祈りつゝ、又、かゝる同志の發見を期待しつゝ、この雜駁な紹介の筆を一先づ擱く事とする。(編輯部後記。この一文は佐々助教授にお願ひして皇軍進攻のすつと以前に頂いてあつたのだが、發表のかく迄遅くなつた事を深く御詫びしたい。)

夏の八幡平と奥の富士

中村 謙

保養と登山とを兼ねて夏の八幡平へ行つて参りました。最近國立公園の候補地になつたので、之を訪づれるもの多く、中々賑やかでした。景色がよく、周圍に温泉が澤山有つて、いくら降り込められても平氣で居られるのが何よりです。

第一日は生保内下車。早速營林署の好意で森林鐵道に便乗させて戴けたのは有難かつたが、終點の戸瀬事業所へ着いたときは、最

う五時過ぎで目指す鹿ノ湯までは覺束ないので、途中の鳩ノ湯泊りいたしました。

森林鐵道は只今では岩ノ目から小和瀬川筋へは入らず、眞直北へ進んで戸瀬ノ瀧ノ澤と沼ノ澤の合流點附近まで延びて居ます。來年は釜黒川の合流點附近まで延長いたす筈です。併しこの鐵道には誰れも乗せないことを原則として居ますから當てにしてはいけません。三時間乃至五時間を要します。

鳩ノ湯も新湯も一時湯舎が有つたのですが、只今は有りません。併し鳩ノ湯はいゝお湯で、鹿ノ湯の毒水排除の工事をしてゐる人々の飯場が有り、同じ棟の長家に里の人々が十數人長湯治に來てゐました。

第二日は五十曲を登つて平場ノ澤まで行きますと、時ならぬ雨が降り始め、遂に鹿ノ湯へ泊り込んでしまひました。只今平場ノ澤を一寸登つたところ、さうですネ、丁度地圖の七五〇米附近から平らに尾根の左をまゝ立派な道路が出來てゐます。毒水排除水路沿ひの登り易い道です。従つて地圖の點線は廢路となつてしまひました。

鹿ノ湯は今日では玉川温泉と稱し北投石を産するので有名です。第三日は八幡平を経て藤七温泉までのしました。焼山の東北面では宮川の鑛山が硫黄の採掘を盛んにやつてゐます。地圖の點線は之を又一林道と稱し、新たに樹

森林道といふのが樺森の南端を経て後生掛温泉に通じてゐます。途中に毛氈長根といふがあつて、沖もいゝところですよ。

後生掛には有名な泥火山が有り、金米糖石と共に今回天然記念物に指定されたそうです。又湯沼も慥かに一見の價値があります。

八幡平の頂上に登つて考へました。成程これちや吹雪のときに、ごうにもならぬと……頂上は高さ一六一三・六米。見渡す限りアチモリトマツの林です。晴れ

てはゐましたが全然遠見が利かす残念でした。でも私の印象に残つたのは寧ろ八幡平です。これこそ八幡平の生命ではないかと思ひました。實に麗しい景観です。高山

植物の盛りには、さぞかし想像されました。最近沼から源太森、茶臼岳を経て松尾鑛山に立派なみちが開かれたさうで、これを傳つて歸るのが一番榮でせう。

私は温泉が懐しく藤七温泉への道を辿りました。こゝには蒸ノ湯と同じくオンドル式の長屋建が有り、簡素で中々いゝ温泉でした。

第四日は落峯から三米坑を経て屋敷台に到り、鑛山用軌道にて大更驛乗換好魔驛を経て東北線の瀧澤驛下車。岩手山に登らうと思つて瀧澤に行き岩手神社に一泊いたしました。

瀧澤から分れまでは眞直ない、道路が出來て居り、それから柳澤までは坦々たる氣持のいゝ道です。

第五日は岩手山に登り裏口の網張温泉へ降りました。岩手山は實にいゝ山ですネ。殊に裏側の八ッ目(一名お花島)附近はこの世の樂園とでもいゝたいところですよ。最う少し東京の近くにあつたら、どれ丈け登られる山だらうと熟々考へました。鬼ヶ城に屏風ヶ岳の奇觀、御釜湖に御苗代湖の幽邃、頂上業師ヶ岳の大觀、大地獄の壯

觀、一つとして我々の興味を率かぬものは有りませんでした。

網張温泉は日本地理大系を見ると、武田久吉氏に依つて「本邦第一の汚穢不潔な温泉場」と、こつびごい批評を下されて居りますがそれは半世紀前の話、今日では五六米下の葛根田發電所まで一日三回バスが通つて居り、近々湯まで横付けになるといふことです。湯舎も今のところあまり、きれいな方では有りませんが決して不潔では有りません。それに庭からの眺めが素晴らしいです。遙か向ふに早池峰から鳥帽子岳までの山や平野を望むところは、そう何處にもこゝにもある景では有りません。

殊に朝日の出るころの眺めは、こたへられぬ絶景でした。聞くところ最近國策にそつて、立派な高原療養所が出來るとか。全く面目を一新することだらうと思ひます。

第六日は發電所からバスにゆられて磐石まで参り、それから盛岡で乗り換へて一氣に歸京いたしました。もう一日餘裕が有ると胸

ヶ岳へ登つたんですが……東北を旅してお米のおいしいのに今更乍ら驚きました。どうして今までこのおいしさが分からなかつたかと、不思議に思ふほどです。大東亞戦争は實際我々に色々なことを教へて呉れましたネ。

圖 書 介 紹



シヨンバーク著
志摩碌郎譯

未知のカラコラム

生活社刊

定價 二圓八〇錢
一七・四・一〇發行

或る書物に依ればレジナルド・シヨンバーク大佐が英國の密偵である事は隠れもない事實であるらしい。彼の中央亞細亞に於ける足跡は可なり廣い。天山々脈の踏査などでも前後四回に及び、天山東部の博克圖鄂拉山脈中の馬納斯山塊中に七、三〇〇米突の山を發見してある。之が確定され、ば天山々脈の最高峰は騰克里汗山(七、一九三米突)ではなくなる譯だ。此の他フンザ河の西部から北部、東部にかけて、詰りカラコラム山脈西部の踏査はアルバイン・シャールやザオグラフイカル・ジャーナルに度々發表されてゐるので本會々員には既にお馴染みの筈である。

今度前記の様な譯書が生活社から損徳を度外視して(こいふのは餘り一般的なものとは思はれないから)發行された事は、吾々此の方面に特殊の興味を持ち、常に研究を行つてゐる者にとつては洵に有難い事と云はねばならない。

とは云へ、譯者志摩碌郎といふ人がどういふ人かは知らないが譯語と地名、人名等には相變らずピントの外れた個所がないでもない。和蘭の探検家フイツサーがフイツサーとなつてゐたり、ケニス・メイスンがケニス・メイソンとなつてゐたりするのは人名の誤りシムシャール又はシンシャールがシンガ、とグの字を入れてゐる事はよくないと思ふ。

間違ひらしい所を頁の順に調べて見ると一四頁の最初の行にわざ／＼一千六百フイートとあるのは一萬六千呎の誤り。三八頁のサー・ジョージ・コツカーソルはリルの誤り、但し之は校正洩れであらう。同頁のケルンな堆石標は積石(標)の方がいい。四〇頁以後に出て来る「氷堆石(氷河によつて生じた堆石)」は氷河堆石とするか或は單に堆石として説明に(氷河によつて搬はれて來た堆石)位にして

置いた方がよいやうに思ふ。

一一四頁一行目の立方形雪塊は可笑しい。之も氷塔(セラツク)とするのが普通である。一八八頁の「バロツク・ワークマンズ」が「ス」は變だ。スはこの場合複數(夫妻)の意味であるから日本語ならワークマンとすべきである。次頁の「ラスト」即ち「眞鍮の」とカン即ち「鐵山」とある眞鍮は之でいいのだらうか。原文にはPost-tuneとあるのだ。眞鍮なら Brass であり、又「眞鍮の鐵山」なんていくら未開の地でも變である。之は鍮の字が餘計なのであらう。但しPostに眞鍮の意味があつたら失言は取消しにする。一九四頁ホンタンはホーダンの誤植であらう。こゝうした新羅省邊りにある地名には出来る限り漢字を持つて來るだけの勢力を惜しまないで貰ひたい。中にはいくらか調べてもなか／＼わからぬものがあるが和蘭(ホー又はコータン)位は大概の地圖に出てゐる。

二〇五頁の五行目「イストロ・ナル即ち蹄鐵」はイストル・オ・ナールが正しいが、原文にも續けて Istro-Nal と書いてあるから之は原著者が悪い。

巻末にある附圖は餘り感心しない、少くとも一般向きではない。理由は、唯大きなだけで山脈が一

見してどう走つてゐるのかわからない事、原書の地圖には等高線で高低が出てゐるのであるからそれ等の高い所を辿つて太線位は入れて置いて欲しかった。シンシャール峠の所などはバミール・イ・タン河とブラルドウ河の支流とが一緒になつてゐるやうに見えてゐて具合が悪い。又右上の地圖と共に縮尺の距離が哩だか軒だかわからない。英國人の書いた地圖は大概哩で表はされてゐるが(一時が一哩といつた具合に)、軒の場合もある。經緯度線が入つてゐるからいゝやうなものゝ數字だけでは不親切である。

又右上小圖の右下にある湖を「ランソン・ツォ」してゐるのはどういふ譯か。原圖にもバンゴン・ツォと書いてあるし、私が今まで見た文獻でランソンと書いてゐるのは一つもなかつた様に思ふ。だが之を要するに、右の如き多少の誤りらしきものはあるとして、カラコラムに關して出た最初の譯書としては、まづ無難でもあり、翻譯もスラ／＼と行つてゐるので、此の方面への日本語の入門書としては充分お奨めし得る本である。(吉澤一郎記)

山 と 人

あれはたしか昭和十五年の秋だつたと思ふ。學生懇談會の打合せで東都の山岳部の人達が虎ノ門のルームへ集つた時、慶應の山本雄一郎君から「神戸商大の山本を御存知ですか」と聞かれた私は、一度も面識はなかつたけれ共「ケルン」かなんかで讀んだ「山岳部の行くべき道」を記憶してゐて「えゝ名前だけは」と謂ふ様な返事をしたが、「じつは僕の親戚に當るんですが、最近戦死しました」と言はれて、何んとも言へぬ氣分に浸つた事を覚えてゐる。

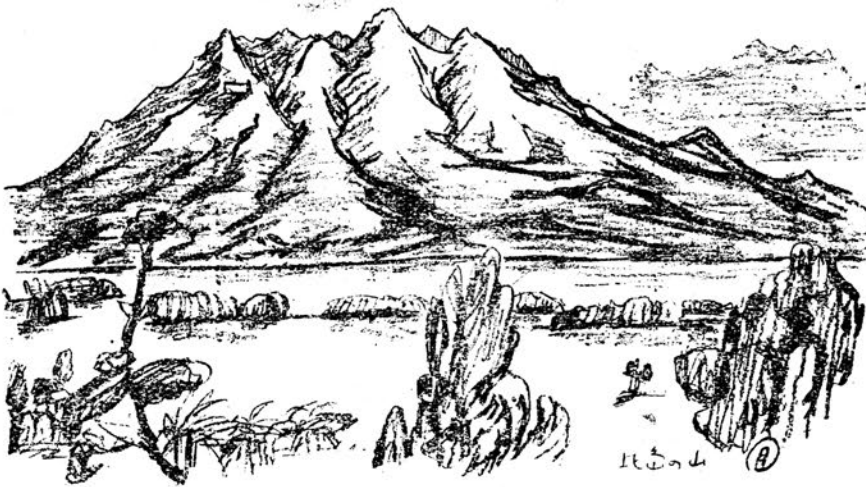
『山と人』一卷はその山本明氏の遺稿集として、恩師田中蕨教授其の他岳友諸氏によつて編まれた好著である。本書は三部からなつてゐて第一部は氏が軍隊へ入つてからの隨想、手記、手紙等、ごちらかと言へば發表を意圖して書かれたものでないもの、第二部は既發表の發行記、第三部は研究、隨想とも言はれるべき種類のものである。

この中一番興味深く讀んだのは第一部でこの中に讀者は岳人としての又教養人としての山本氏のプロフィールを隨所にみることが出来る。創作ノットだとも註記され(一〇ページ四段目へ續く)

會員通信

ピリピンブンド

月原俊二



高らかなる岳界の歩調、戦時下益々高潮大東亞戦争を契機とせるものゝ如く大日本山岳聯盟の結成と健全なる進軍。どの岳友よりの便りにも聲高らかに賞讃せるを聞く。

藤木部長を迎えての英彦山、大ケ岳、宇の島間の大縦走鍛錬行軍日本山岳寫真展の開催。第四回冬季特別錬成會（大山）等々。眞實の姿を偲ぶ事が出来ます。さて小生ピリピン・ブンド（比律賓の山）の一つにも登攀する事が出来ました。登攀と云ふより、ジャングル山岳戦参加であつてのんびりした自由登高でなく、其處には敵巨砲ひねもす夜もすがら炸裂する第一線の血と汗と油の登高です。場所山名、標高俱に明記をばかります。まづスケッチを書いて見ました。

未筆乍ら新體制下のJ・A・C會員各位の活潑なる行動をピリピンの一角より遙かに御願ひしつゝ。バアラム（さよなら）

前線便り

山本雄一郎

一月初旬千葉縣佐倉に入營以來北支に移轉、現在の部隊にて教育中に御座候戦時下統後各位の緊張せる生活の中より眞摯なる態度な

以て登山を續行されつゝ在るものと拜察致候。皇軍の南方作戦に於ける戦果も亦赫々たるものにて、岳人の領域と使命も亦前途洋々たるものが御座候。戦地に在り同慶至極に候。

鈴木正俊

入隊後早くも四ヶ月にならんとし毎日元氣にて軍務に精勵致して居ります。五月十日より幹部候補生の集合教育のためこちらへ参りました。約六ヶ月居ります。電氣のデの字も知らぬ小生大いにアゴを出してゐます。

部屋もさぞ賑つてゐることです。行きたいですが外出も當分は出来ないいで山のニュースでも御知らせ下さい。（相機原にて）

袈裟丸山

中村謙

先日四年振りで袈裟丸山へ行つて参りました。この前のときはハイヤーが自由だったので、沼田驛からハイヤーをとばせて南郷まで行き、それから根利牧場を経て袈裟丸山の西南の尾根に登り、小袈裟丸、大袈裟丸から小丸山、二子山を経て原向驛に降りしましたが、此度は神土驛下車、横川のさる學校の寮に一泊の上、翌日押手川沿

ひに賽ノ河原に取付き小丸山から大袈裟山へ登りました。

押手川は押手の部落を過ぎる間もなく兩俣に二分します。右俣は之を塔ノ澤川と云ひ、左俣は之を西山川と云つてゐます。この出合の一寸奥まで澤入驛から立派なトラク道が通じて居りました山から出して來た材木を搬ぶ爲めの道路です。塔ノ澤川に入る之間もなく不動ノ瀧が懸つてゐます。それから容柳ノ瀧を越し、澤が西へ屈折するところで道は二分いたします。眞直へ行くのは二子山へ通ずる道です。

尙も本流を傳ふと直きに、この附近で有名な「寢釋迦」と「澤入塔」とが有ります。前者は約三米の巨石が嵯峨の上に横はつてゐて最近さる石屋さんが寢釋迦の像を刻んだので其名が有るのです。後者はその對岸に屹立する高さ二十米あまりの累積した自然塔です。いづれも一訪の價値がある云へませう。

これから奥には徑はハッキリついてゐますが、あまり人通りがない爲めか、葉が繁つてゐて一寸煩しいです。だが通行に困難する程度ではありませんでした。

賽ノ河原に出ると袈裟丸山は勿論あたりの眺が急に展けて参ります。

す。名稱に相應しく、こゝかしこに石が澤山積んで有ります。その中央と覺しきところに珠玉を手にした立派な地蔵様が建てゝあります。

小丸山の上りは笹が茂つてしまつて動もすると登路を見失ふ程度でした。ところが其次の突起を過ぎると急に小徑を合して道は明確になります。之れより黒木の中に入り、登頂いたしますが、山頂の展望はいつと乍ら素晴らしいものがありました。殊に赤城・武尊・白根・錫を初め残雪豊かな上越の山々は真に見ごたへがある云へませう。

歸路は小中川の本澤に降る尾根を辿らうとしましたが、道が不明の爲め、一旦先きの分岐點まで引き戻り、それから東澤沿ひに降りました。初めは至極上々の道でしたが降るにつれ、木馬徑が落ちた箇所など續出して、あまり感心した道でなくなりました。伐採に使用してゐたころは賑々しい道だったのでせう。この分だと最う一、二年で通れなくなりさうです。

半時間ばかりしてから、我々は道のよい方に従つて左岸に涉りましたが、これを右岸沿ひに眞直木馬徑を行くと地圖の點線に合して柏ヶ谷へ出るんだと後になつて氣付きました。

我々の道はヒラを廻りめぐつて幾つかの小谷を過ぎ、とゞのつまりとび出したのがバラ澤峠です。澤入から柏ヶ谷へ通する點線路が乗越す小さな分水嶺の所です。こゝから西山川沿ひに澤入まで幾何もありまゐつてした。

この道を巧みに利用すると、一日では沖もとあきらめてゐた袈裟丸山も案外容易に登來出來ますから皆様の御來遊をおすゝめ致します。靜かな展望の勝れた沖もいゝ山です。

(地圖) 陸測五万「足尾」

福岡より

秋庭 俊彦

近日歸京するお名残りに久住山へ行きました。

四月二十四日の夜、朝日新聞支局主宰で、福岡市教育會館に、此地方山岳聯盟の指導者講演會があり、大阪から藤木九三氏が來福されて「山と民族」の話をされました。そして二十五日から二十八日まで、久住山で岳聯の人々百何十人の指導練成會が開かれました。私はその後を追ふやうに、二日おいて、五月二日に大船山、法華院三日に久住山、飯田高原を歩いたのです。途中、お知らせしたいものを一つ見ました。それは久住山

から豊後中村驛へ出るコースの分岐點に、特志家の寄附した石の導標が建てゐたことです。私が出會つたのは五つ。いづれも東京小畑惟清氏の寄附。他のコースにも建てゝあるかも知れません。西千里濱、北千里濱の分岐點などは重要な場所でした。落書を自己宣傳するのとは違ひ、かうした特志は、費用も並々ではないでせうし、山への深い愛情なしには出來ないことだと思ひました。

新緑の奥木會より

茨木猪之吉

去る十三日甲府一泊、翌日先づ日野春高原の新緑に接し饒尻より木曾路に入る。例の奈良井の宿に落ち付き、毎日鳥居峠の新緑を描きに行く。お節句の草餅やら山の食物が豊かで久々満喫した。奈良井川の鯉の御馳走も重ねて食膳を豊かにし、こゝでは配給酒も相當に頂き、更に木曾福島へ一番列車で向ひ黒川渡からテッ／＼黒川に沿ひて登る。振りかへると駒ヶ岳の雪を頂いた山脈が屏風立に山里は春で桃の花も山梨山櫻、鶯は鳴く桃源郷だ。最奥の部落、折橋に着き少さい可愛らしい折橋峠に登ると御岳と乗鞍が一寸顔を出し落葉松も白樺の芽出しの高原帯牧

富士「喫茶店」

今川 良雄

場に降り末川開田村で「古屋敷」の下島醫院主を訪れ一泊。翌日は雨で休養、それから奥地へ西野峠から村に「やまか」旅舎に一泊、生一本のそばの御馳走は有難し、御岳を近く描き寄關谷峠を越し長峰峠にかゝり道なかへ留野原に出て「日和田」に入る。もう飛騨の國の境で山家の春は明るかつた。十三曲峠から一氣に降り益田川に出、舊木曾街道野麥の部落に急ぐ夕方やつと區長さん宅に泊て貰ふ無理のないのは食糧不足で他人を泊る豫地がないさうで持參の晝飯の残りや燗端で頂きそれでもお茶も香物は澤山あり、それでも暖かい「ヒヘ米」を一杯頂戴して炬燵といふ寒さで床に入る。翌日は大霜で薄氷りが張り驚ろいた。野麥峠に出る道をあまり穂高見峠へまして谷に残雪あるのを踏んで番所へ出た。牧場の放牛と白樺の芽出し、そして猪谷の山居を訪ふ、例によつて大工さんをやつてゐる奥さんに「そばかき」のおやつを作つて頂き大野川福島屋に着いた入浴して清穀君と久々鍋をつつき傾ける。翌日早朝飛び出し山家の朝日光は高く島々より澤渡までのバスに乗り島々より松本へ出て歸京。十一日間の新緑の驛山旅は愉快だった。

此の冬は富士山の日歸り登山を散發的に計畫して五回程出かましが三回丈頂上を極め測候所の温かいストーブを圍み紅茶を御馳走になつて其上レコードを聞かせて貰ふ等充分に「富士屋喫茶店」を味ひました。

御殿場を午後十時出發すると大體夜明頃五合番小屋に到着充分休養の上剣ヶ峯まで三時間一四時間アイゼンの爪が一分位しか入らぬ堅氷の八合から上は相當緊張します。正月四日は物凄く荒れ何回となくヒツケルに獅噛みついて猛風に耐えたものでした。富士の名物の、強風には何等ほごすべき手段なく退却あるのみです。

去る十七日受鷹逆走をやり原驛下車、裾野驛まで十二時間、殆ど休憩なしの耐久ハイキングでした。鋸は一寸緊張させられます。折悪しくカスに巻かれて眺望皆無で残念でした。須山から御殿場行のバスが當にならので結局裾野まで歩かせられました。小雨の中を疲れた身體でボソ／＼歩くのは淋しいものでした。時節柄さば言えバスがさつぱり當にならぬのは困つたものです。

尾瀬の便り

川崎隆章

○都では露濁の花も散りがたとなり、銀座の喫茶店のコーヒーもアイスコーヒーとなる五月下旬から六月上旬のかぐはしい若葉の頃は山も簡単に考へて出かける人が多かった。しかし山は未だ木の漸く芽ぐんだ許りで森の中や山の北側には残雪がベトリあつて路型が全然分らないので忽ち右往左往し、遂にアイスコーヒーを飲むまでもなく、雪の溜りと云ふ、極めて能率的に冷たくさせて呉れる山の饗宴に預かると云ふ次第である。この五月末は私が尾瀬入りをした折にも、富士見峠から尾瀬が原への下り、及び會津駒より大津岐峠へ堅雪を踏んで麒麟手へ下る際誤つて大津岐開懸へ下つて何れも納涼した人々がある。その中の一組は鬼怒澤林道を通つて八丁の湯へ下ると云つたが、それでは再び同じ苦勞を費すのみでなく、距離も長いから非常に危険であるので引止めた。葛蒲平でさへ一米の橋があつた。これより半月程前も銀山平よりの登山者が三條の澤の上の雪上で野天の止むつきに至つたが、昨年はこゝで疲勞と寒冷の爲遭難者もあつた。若葉の頃の山

が一面倒である。しかし三條の澤は雪解氷で水量を増し壯觀を呈し、辛夷の花は白く石南も咲き初め、原には峯櫻が満開、水芭蕉、立金花、狸々袴なども美しかつた。○燧嶽の崩雪は中腹以上が大雪山を成し、御池嶽の下あたりは冬富士の一番急峻な斜面と同じ胸突きで鏝が必要でさへあつた。道連れになつた青年の一人は往き返り共こゝで百五十米を滑落した。組頭の頂に立つときは、いつも北面の假松を掻き分けて少し許り下つてみるのだ。こゝからは風光明媚な燧田代はデト深澤の頭で見えないが、中腹に池澤を幾つも鏝めてある田代が三つ並んで見えるのだ。一番右手に丸く見えるのは地圃の大池田代であるが、眼下の二つの中右に細長いのが上池田代と云ひ中腹の田代では一番景色のよい所、左の卵形のは三郎田代で總てウダーになつてゐて村人はウダーの熊笹と云つてゐる。こゝへは雪のとき以外は頂上からは下れないが、燧田代からならがなれば掻き上ることが出来る。硫黄澤の長池田代と共に秘中の秘とも云ふ可き佳境である。

○長藏小屋では長英さん(出征中)の御老母に引止められて二泊してしまつた。私がくると兄ちゃん(長英さん)が歸つて来たやうだと云つて懷しまれ喜ばれる老い先短かい友の母は、又私の亡き母を思はせて心かなしい人である。温泉小屋の團吉さん(本名段吉)が村へ下つたさきいて殘念であつたが、留三郎さん(七入りの星實藏の息子)に逢へたのは嬉しかつた。沼山峠のクロクハ清水(クロクハは土方の意、土方の見付けた水場なり)を更に村(檜枝岐村、尾瀬の北半は檜枝岐分なり)へ半丁程行つた右側にウダーのナニ様(山の神)があつて、昔上州の馬喰の往復盛んな頃馬方の信仰の厚かつた祠であるが、この下がウダー(鞍部)になつてゐるのでウダーのナニ様と云ふのであつて、ウダーは馬のクツバチであつた。(クツは馬の草鞋のこき、アチバとはりかへる所の意)これから抱き返りの瀑)不動瀑と云ふに非ず、クロクハ清水も不老水に非ず、これは河れも磐林署で勝手に命名したものの、左に見て道行ツ澤に下りつた所の土橋が五番橋で、次の四番橋の間のウダーにイシコウのクツバチがある。イシコウは石の洞であつて(谷川岳には幽の澤がある)今は草に掩はれてゐるが、左手に人一人入れる位のイシコウがある。

○今夏の尾瀬は宿泊料(二食付)参圓、辨當代三十錢であるが、配給米の不足から米持參を希望してゐる。小屋ではそれを前夜受け取り(二合)翌朝出發前に握り飯にして登山者に提供する仕組である彌四郎小屋は増築が成つて素晴しく立派になつた。懸ては村祭り(宵祭り八月廿八日、本祭り廿九日)も近づく。(六月十日)

(七ページ下段山と人續き)

である『初登攀』の一篇など殊に好ましく思はれた。今年の二月號の中央公論に『阿蘇火山』とか云ふ山を主題にした小説がつてあつたが、それよりも私などには何倍か右の文に身近き感情を味はつたことか。

第三部の中には『山岳部の行方』『部報論』の様な私共グループでも談論するに易く文字に表すにむづかしい文章もあり、又『ヒマラヤの語源について』『火田及火田民の一プロフィール』の様な研究的のもの、等眞摯な學生々活の一面を物語る文字も收められてゐる。

田中教授と西岡一雄氏の文は山本氏の面影をつたへて剩す處がないであらうが、この書物が單に故人の知人岳友のみに頒つものではなく、一般に賣り出した書物であるからには、故人の登山経歴とか山岳部に於ける横顔とか陣歿された時の様子など今少し詳しく記載

された方が讀者に親切だつた様に思ふ。

方面は違ふが曾て岩波から出た『太田伍長の陣中日記』などの書は此の點遺憾なかつた様だ。又一般には出されなかつたけれ共ハテガリでなくなつた北大山岳部の有馬、葛西兩君の遺著『歩み』等も殘された人達の友情がもつと濃やかににじみ出てゐたやうに思ふ。

この書物は現下岳人必讀の書とかなんとか聲高に謂ふ必要のない本であらう。併しそれだけに短い一生を眞面目に充實して生きぬき醜の御稱として九段に返り咲いた故人のなつかしい憶ひ出さして、故人と親しかつた人々にはそのよすがともなり、又知らざりし吾々にも同時代の未完成ではあつたが立派な岳人ののこした言葉として繰返へし讀まれてゆくであらう。

挿入された幾枚かのスケッチは故人の豊かな才能を更に限りなく傳へてくれるが足立源一郎氏の装幀は遺憾乍ら感心出来ない。惜しまれつゝ逝つた幾人かの若き岳人に對すると同様、この人に更に長き生命を希ふのは私のみではあるまい。(望月)

高山深谷

送料共七圓九十五錢
右御入用の方は直接本會へ申込下さい。



積雪期木曾駒 黒川本谷（下）

跡部 昌三

⑧

雪の黒川本谷に未知の部分を残して来た事と、私達の間にスキールートとしての福島道がまだ判つてゐなかつたので、之を福島道を登攀して黒川本谷を滑降する、木曾から伊那へ越える所謂本岳横断がその後二月の計畫としてたてられたが、結局三月にはいつて杉浦跡部によつて遂行されることゝなつた。

三月十一日、未明に福島下車、駒ノ湯を過ぎる頃より夜が明け、二合目上の草地のデクザクの中程より健康な陽を受けはじめた。この登りが終つて九時五十五分に尾根に出た。此處から森林帯にかゝることになり、雪もつゞくのでスキーをつけることにした。雪質は雨を受け、天候が續いた後でかたく、晴天であつても森林帯の雪のゆるむのは部分的に過ぎず、しかし、堅雪なのはスキーを穿いてゐ

る時であつて、急斜面のトラグアイスなど、アイゼンや輪標での行動を要求される時は、容赦もなく腰まで落ち込んだりして、一應踏んでおく必要があつたりする状態であつた。行動は遅々としてばかり、五合目少し手前の鞍部にある捕鳥小屋に達した時は十七時四十五分にもなり、豫定の六合目の避難小屋入りを諦めて、こゝを第一日の泊場とすることにした。

十二日、こゝろよく晴れた朝だつた。八時〇五分、アイゼンに輪標をつけて、夏道通り尾根の右下のトラグアイスにかゝつた。尾根筋に出てスキーにかへ、しばらくして一寸した岩が出てくる所で、夏道が判らず、左へからんだものゝ木曾駒の、雪質と地形の特有ないやらしさに惨々悩まされ、所謂悪場といつたものもないに抄どらず、二二〇〇米のピークのあたりでは登攀の興味をすっかり失つてしまつてゐた。しかし、快晴の下にあつては旗をまく譯にいかず、やつと十四時十五分になつて六合の避難小屋についた。明日の努力に期待して第二日を六合で終ることにした。

十三日 六合から更に夏道を迎えることは、いままでの調子からみて、相當つらい仕事である。豫定もおくれてゐるしするので、駒石を越えることにして、アイゼンに輪標をばいて、七時二十五分に小屋を出た。風は梅の樹をゆさぶつてゐたが、氣持のいい朝の光が充ち溢れてゐた。案内に針葉樹林帯を抜け、輪標を外して報ひられた歡びをアイゼンに、九時三十分には駒石を越え、十時には麥草岳の頂に立つことが出来た。木曾側の風は、さして苦とする程ではなかつたが、二〇〇〇米位に漂よつてゐた雲海が、さもすれば御岳を乗り越えやうとするのが氣になつて仕方がなかつた。が麥草岳を下らうとする頃は、遂にカスに包まれてしまつた。この下りは南面で陽を受けたため、雪が腐つてアイゼン操作は全く氣苦勞であつた。麥草岳を下れば、大崩谷の上部をなし、前岳へつゞく滑尾根となるが、この腐つた雪では思ひやられたので、滑尾根となる手前の鞍部からスキーをつけて、右へ廣い澤を滑降することにした。最初に段をなしてゐるころに夏道があるらしく、山姥の床らしかつたが、視野が狭くてはつきりせず、其處より等高線にいかうとしたが、眼の前の小尾根に達するのに急傾斜のためスキーをぬがればならぬ始末、小尾根に立つたが、更に夏道を求めてトラグアイスを續けてゆくことは時間的にも困難な

ので、アイゼンをはいて小尾根から出てゐる小澤を下つた。傾斜も樂になり、場もいゝのでスキーにかへ、右山で高度をあげていつたもう黒木は影もひそめ、岳カンバの領分、夏道の悪場も終つてゐた。たゞカスに閉された視界をなかつのみ。すつかり解放された氣持で王ノ窪をめかけて登つていつた。暫く直登したものゝ、カスのなかから見えくる前岳の岩稜からして、右へ寄り過ぎてゐることに氣付き、左へ横切る氣持ちで登高を重ねていつた。が、豫期に反して次第に傾斜が加はつて来た。曾つてこれより悪い條件の下に此處に登つたとき、樂々玉ノ窪小屋に登りつたがと思ひつゝ、注意して左へまいていつた。そうすることによつて玉ノ窪にはいる筈だと思つてゐたのに、カンバのある急な小尾根が行手のカスのなかに姿を見せたときは、ルートを誤つたことをはつきり知つた。けれど苦しい思ひをして登つたところは簡単に引下がれもせず、小尾根に出た。其處は奇美世道があるあたりであつたが、先にはまだ嫌な岩稜も見え、雪のついた今では絡むことは困難であるし、下はカスのなかに落ち込んでゐて、小尾根を登り切るより方法はなかつた。吹きつける風に氣を配りながら、息

をついで四つ這ひの悪戦苦闘。アイゼンと輪標にかへてから三時間アルパイトの後、風とカスにもまれてゐる丸味を帯びた稜線がほのかにみられて間もなく、前岳の頂より一つ上松よりのピークに出ることが出来た。玉ノ窪小屋まで樂々と思つてゐたのに、思ひがけなくも前岳に登らされてしまつた。流石に頂では猛烈な風が吹き荒んでゐた。既に十八時二十分、直ちに玉ノ窪小屋に下り、木曾小屋への登りにかゝた。肩にすつしりさかゝるスキーの重みに喘ぎながら、動かぬ脚をひきずる様にして、完全に暗くなる頃、木曾小屋についた。恰度十九時。今年は、小屋は殆んどはいれぬまでに雪がつまつてゐた。奥の左の隅では僅かな面積であつたが、どうにか雪が除けられた。岳の咆哮も此處ではほんにかすかなもの、始めて二人は顔を見分はすことが出来た。

一も使へず、アイゼンのまゝ、黒川の源流の窪みを求めて下つていった。五十分程して合宿の時に苦勞した大タルに出た。今はその姿をすっかり雪に消して譯なく下るこゝが出来た。瀧下でスキーにかへカンパをあさじ、針葉樹林の次第にのびてゆくなかな谷通しに滑降していった。前岳澤を過ぎ、流れを見るやうになつてから、夏道を求めて追つてみたが、暫くして見失つてしまひ、再び流れに添つて左岸を滑つていった。一日の経験から、夏道に心を惹かれ、棧道をみい出したりしては夏道に上つて傳ひ、間もなくしてそれを外し、仕方なく谷に戻つて滑るさういふ無駄な勞作を再三ならす繰り返へしかなりの時間をそれに浪費してしまつた。これは一月と三月との積雪量によるものではあるが、黒川本谷に於ては、夏道による必要がなく、左岸を谷通しに下ることが可能であることを知つた。瀧谷(伊勢瀧の谷)の合宿も雪を傳つて問題なく、十四時三十分、木小屋の小屋でスキーをぬいだ。全身すぶ濡れであつたが、小屋の燃料はそれ等を乾して僅に餘りがあり、屋根の下で心安さは、もう雨の音も苦にならなかつた。小屋の東の一棟は積雪の重みで潰れてゐた。十五日、雲はどんより垂れ下つ

てゐたが、雨でないのが何より嬉しかつた。小屋を九時十五分に出發。四合目にてシルルをつけて夏道通り進んだ。三月にはいつてからの異常な暖氣による雨は、オツ越近くの雪を處々消してゐた。オツ越十二時十五分。合宿のときの経験からして、藤澤を下ることにした。が雪も彫く、完全に腐つてゐて滑降には骨が折れ、デクザクを終つてからスキーをぬいたが、よく抜ける雪は歩くのも樂ではなかつた。次第に煩はしい残雪も少なくなり、藤澤添ひの道を離れて宮田への道を下つた。久し振りに向山氏と、あの爐端での嬉しい語りひを胸に描きながら。



目まで、あるが——動きがそれないこのやうなルートでは、夏道が判別出来、且つ、スキーに適する雪質であるときを選ばなくてはならぬ。三月では、大體に言つて一月とは條件が甚しく異なる。スキーのみで登高が困難であるし、六合より夏道を傳ふことは至難に近い私達の場合、いくら間違つても、三日目は本岳を越えてゐると思つてゐたのに。木曾小屋までやつたであつた。六合から私達のさつたルートは、春としては、ガスのためとは言へ、目的から言つて前岳へ登攀するなど感心しないが玉ノ窪を登れば、要領を得たル

4. モルウカ諸島

高度 順位	山名	高度 (m)	備考
1	Ternate	1715	Halmadera島
2	Gamkonora	1635	
3	Saolat	1508	
1	Boekoe Kiemataboe	1730	Tidore 島
1	Sibela	2111	Batjan 島
1	不明	1611	Obi 島
1	Tomahn	2600	Boeroe 島
2	Kaoc Palatmada	2449	
3	Kakoe Tegalago	2114	
4	Batakboeal (Waloec山脈)	1731	
1	Binalja (X山脈)	3055	Ceram 島
2	Nussa Heli	2900	

5. セレベス島 (北より南へ)

高度 順位	山名	高度 (m)	備考
20	Klabat	1995	T 山脈
22	Sopoetan	1827	
24	Noenoeka	1606	
21	不明	1960	
19	不明	2070	U 山脈
16	Tentolomatinan	2207	
11	Maling	2707	V 山脈
13	Ogoamas (又はSadjolo)	2565	
17	Sidol	2199	X 山脈
2	Nokilalaki	3311	
4	Waekara	3127	Molengraff 山脈
9	Kasintoeroe	2855	
7	Kamboeno	2950	
18	Kajoga	2184	Z 山脈
15	Loemoet	2280	
14	Boeloetoempoe	2400	Batoei 山脈
12	Tokala	2630	
25	不明	1590	Balantak 山脈
23	Tangkeleboke	1782	Wawoomboe 山脈
10	Mekonga	2790	Quarles 山脈
5	不明	3107	
6	Kalando	2963	
1	Rantemario	3440	(一に3080mとす)
3	Latimodjong	3300	
8	Lompobatang (又はPkvanBonthain)	2871	
1	Salajer	1780	Salajer 島
1	Kabena	1580	Kabena 島
1	Awoe	1860	Sangihe 島

である。

福島道で言へることは宮田道にも當てはまる。一月の宮田道を傳ふことは、例外はあらうが、さして難しいことはない。しかし、三月では福島道と同じくまづ許され難い。だが、いゝ事には、四合目から上であるが、黒川本谷を谷通しに登降出来ることである。

宮田道は六合目邊りから夏道は黒川を離れてゐるが、何も知らぬ人は積雪期でもこれを登降する様に言ふが、果してこれを試みた人があるかどうか。さまれ、これは馬鹿げたルートであり、勞のみ多い事は斷るまでもない。例へば輪標であつても本谷を詰めて寶剣小屋をめざすべきである。

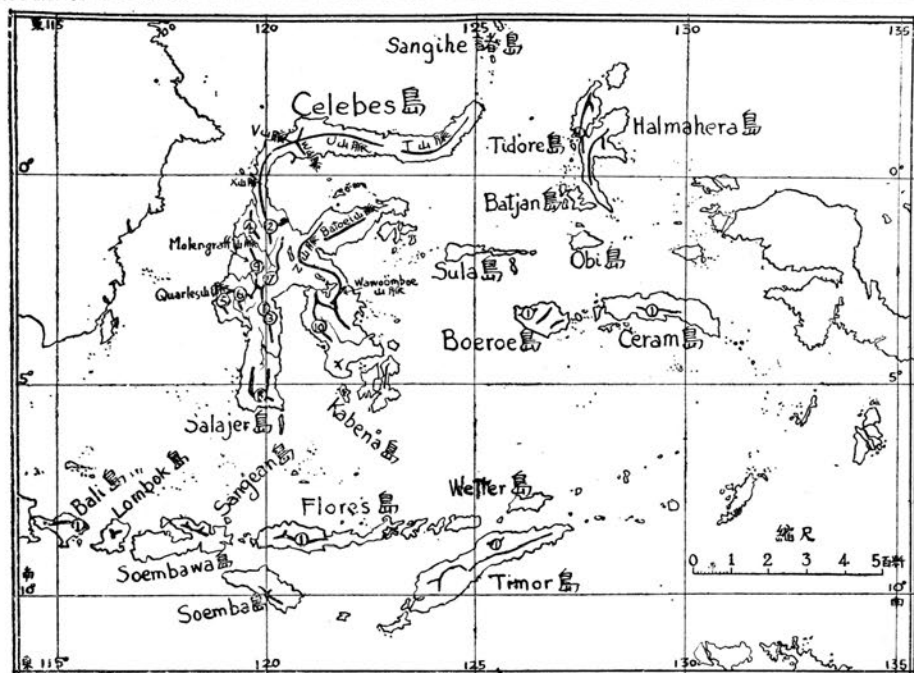
宮田道で問題になるのは、オツ越以下で、この千米の登降が樂にこなせれば譯はない。胸ヶ根樂園道も藤澤洞の徑路でも、輪標なら兎も角、だがどちらだと言へば後者を推さなくてはならぬ。この外に黒川の發電所へ出る道があるが私はこれを行つたことがないので、つきり言へないが、スキーを利用するにはいかにも知れない。だがこれは距離的に負擔が大きい。

今度の本岳横斷に關聯して、雪の木曾駒について書いてみたい多くのものがあるが、此處では簡単に報告さしていただく。とにかく

東印度諸島

主要山岳高度表Ⅲ

(山名は1500m以上のみを掲ぐ——吉阪)

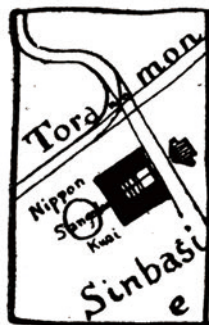


3. スンダ諸島

高度 順位	山名	高度 (m)	備	考
2	Batoekaoe (P. von Tabanan)	2276	Bali島	
6	Sengajang	2033		
5	Pohen	2069		
8	Lesong	1860		
7	Brantan	2020		
4	不明	2098		
10	Botoer	1717		
9	Peneolisan	1745		
3	Aban	2152		
1	Agoeng (P. von Bali)	3142		
1	Rindjan	3726	Lombok島	
2	Nangi	2330		
1	Tambora	2851	Soembawa島	
2	Doro orombora	1576		
1	Api	1949	Sangeang島	

高度 順位	山名	高度 (m)	備	考
1	Pojo Mandasawoe	2382	Flores島	
4	Todo山脈	2010		
8	Mere	1700		
5	Loboboetoe	1800		
2	Inery	2245		
3	Anboelombo	2149		
6	Lepemboesoe	1770		
9	Lewotobi	1590		
10	Mandiri	1501		
7	Namang	1703		
1	Boleng	1659	Adonara島	
1	Labalekang	1644	Lomblen島	
2	Cedjolewoeng	1533		
1	不明	1765	Alor (Ombai)島	
5	Meetis	2365	Timor島	
6	Lekaan	1525		
	Timaoe	?		
4	Ermera	2620	(ポルトガル領)	
1	Atlas	3800		
2	Kabalaki	3100		
3	不明	2860		

本會駒において、谷通しに滑降出来るものとしてこの黒川本谷は、例へ四合まであるが、第一に指折らるべき資格を有つものと謂ふことが出来る。



會務報告

常務役員會

五月

5月20日 19時 事務所ニテ開催
出席者 木暮、島山、木村、沼井
塚本、交野、小原、織内、海瀬
委任13名。

議題(議長木暮理事)

1、幹事事務分擔ハ、山岳(逸見小原)會報(吉阪、塚本)圖書(交野、山口)山日記(織内)學生懇談會(金山、織内、吉阪)會計庶務(島山、中司、早川、塚本)研究調査(吉澤)集會(兼松、海瀬)記録(吉阪)ト決定ス。

2、6月10日小集會開催スベタ準備スルコトトス。

六月

6月14日 13時 虎ノ門晚翠軒。
新舊幹事送迎會終了後開催。

出席者 木暮、横、西畑、小島、高頭、島山、冠、木村、茨木、沼井、三田、中司、早川、塚本(新幹事)吉阪、栗飯原、織内、兼松。委任12名。

議題(議長木暮理事)

1、南方の山に關する研究第一着手として南方の山の紹介書を編集刊行のこと。

2、山岳映畫(16ミリ)製作案は今夏の製作に無理あり尙検討のことと決す。

3、6月24日夜、日本商工俱樂部にて小集會開催と決定、講演は(イ)フリーツピンの人と自然(中屋健三氏)(ロ)ニュウギンヤ北岸旅行談(猪熊助教授)
4、入會申込者六名入會承認

購入圖書

井上義男著

大ニウギニアの相貌 與文社

白石譽夫著 岡倉書房

濠領ニウギニア風土誌

シヨンバーク著志摩碌郎譯

未知のカラコラム 生活社

ダイヤモンド社編

南洋地理大系(六)東印度Ⅱ

エフ・チャップマン著

ヘルヴェリンよりヒマラヤへ

ニューヨークハーバー發行

武藤勝彦著

地圖の話 岩波書店

ハツチンスン著 春山行夫譯

アリウシャン探検 新潮社

スヴェン・デン著小野六郎譯
探險家としての余の生涯
橋書店

◎關西支部報告

四月役員會

4月7日17時30分 於ルーム

出席者 松井、富田、栗飯原、木

藤、直木、西岡。委任3名。

議事

1、山岳研究講座中間報告の件

2、日本山岳會賞候補者審議結果

報告の件

3、研究會の件

以上富田幹事より報告

4、十六年度決算及十七年度豫算

の件、松井幹事より説明

◎支部有志懇談會

昭和17年4月18日(土)

於 染工聯合會館及大阪ホテル

出席者 横有恒、中原繁之助、栗

飯原健三、西岡一雄、近藤貞雄

小川正十郎、金井健二、富田健

一

大東亞戦争の宣戦布告により一

時延期せる支部會員總會は4月18

日、横副會長を始め多數會員の出

席通知を得、時局下有意義なる總

會及懇談會開催を期待準備中の處

我國本土初空襲といふ不測の事態

を生じ爲に出席支障者を出した事

は實に遺憾であつた。が空襲前既

に離京下阪された横氏を中心に警
報下にも尙悠々たる心境にて參集
されたる人々を以て有志懇談會と
形式を變更の上誠に戦時下らしい
感激的な懇談會を開いたのであつ
た。

支部受贈圖書

朋文堂及舊大阪山岳會よりの寄贈
書目録つき

マツターホルンを争ふ(書上喜太

郎)、山岳詩集(中西悟堂)、氷雪

のアルプス(木村諭吉)、スキー年

鑑第5號(スキー聯盟)、登山キヤ

ンブ適地案内(金星堂編)。以上54

冊 舊大阪山岳會

山(荒井道太郎譯)、山の魂(石一

郎譯)、アルピニストの心(高須茂

譯)、多摩秩父大菩薩(原全教)

秋川流域の山々(内田正雄)、奥多

摩溪谷(岩根常太郎)、九州山岳第

一輯(朋文堂編)、山の組曲(瀨名

貞利) 靜かなる登攀(高須茂)、山

ミ漂泊(朝史門)、山の子供達(高

畑棟材)、高山植物の培養(河野齡

藏)、日本スキー發達史(山崎紫

峰)、山と雪の受難者(春日俊吉)

野帖餘白(藏田延男)、山村旅情

(依田秋園)、單獨行(加藤文太郎)

わかり易いスキー術(鈴木・小島)

最近のスキーテイング(兩角政人)

圖解スキー教本(櫻庭留三郎)、比

良連嶺(角倉太郎)、冬期登山とス

キーツアー(朋文堂編)、奥武藏の
山と丘陵(春日俊吉)、最後の蠟燭
(坂部護郎)、ハイキングの手引
(時田勇)、山稜(小宮良太郎)、ア
ルプスの微風(山本清一)、山と高
原の旅、上信境の山々、上越の山
と溪(中村謙)、東京附近山の旅
(朋文堂編)、徒歩コース七百種
(獎健會編)、市民ハイキング(菊
池隆之)、ハイキング指導と案内
(田中清夫)、峰・峠・氷河(藤木九
三譯)、ヒョウヤの山々、スキー
日記・山の手帖(朋文堂編)

以上38冊 朋文堂より寄贈

加納一郎譯 アムゼン探検誌

朋文堂 右 加納一郎氏

高須 茂雄 掃 火

朋文堂 右 加納一郎氏

織内信彦著 假松帶

朋文堂 右 織内信彦氏

◎支部整備

圖書報告(製合本)

1、北大山岳部々報 1・2號

2、同 右 5・6號

3、北大スキー部々報 1・2號

4、立教大學山岳部報 1・2號

5、同 右 3・6號

6、登高行 5・6號

7、同 右 7・8號

9、同 右 9・11號

10、針葉樹 8・10號

事務所より

山岳第三十六年第二號の發行が
大變おそくなつて申譯ありません
でしたが漸く六月下旬に出来、七
月初旬全部發送を終りました。御
受取りの事と存じます。

五月初旬會員名簿を印刷に廻し
ましたが、二週間の約束が四ヶ月
かゝり八月末やつと出来上りまし
た。此頃の印刷はこのような状態
で全くほと／＼閉口して居ります
名簿は本會報と共に送り致しま
すが、誤りを發見されましたら至
急御通知願ひたいと存じます。

高山深谷

送料共七圓九十五錢

山日記

送料共一圓三十錢

右御入用の方は直接本會へ申込
下さい。

山岳第三十六年

製本引請

山岳第三十六年の表紙が出来上
りました。製本御希望の方は申出
下さい。製本料は左の通りであり
ます。

製本代 一圓五十錢
書留送料 四十五錢

